関西大學新報
発行所
関西大学新報社
大阪市大淀区長柄中通2
電話（358）2 2 7 1
発行編集人　村井　弘二
（一部　10円）

羽田斗争 その突き出したもの

戦争遂行の体制の 変革への力の結集へ

羽田闘争は、日本帝国主義の本格的なアジアへの侵略を開始する国家権力の暴力指導としての機動隊と安保闘争、目黒闘争、砂川闘争を通して登場してきた国家権力と闘う労働者、学生との階級闘争の尖力闘争であった。機動隊と労働者学生が10・8羽田闘争はその中で京大生山崎君が機動隊に撲殺された、これら総評としての羽田闘争の佐藤訪ベト、訪米の日本帝国主義は、国家権力の、本質を鮮明にした。

反戦闘争が、戦争を遂行する強力な国家との直接的な対決の段階に入っていることをみせしめた。

国家が、ひとびとの極めて自然な戦争反対の意志が、歩一歩と戦争貫徒に向うときベトナム戦争のもとに、このもし崩しの時期をより一層押し進め、道徳させ、決定的なものへ向おうとしている。「国益論」のもとに、既成の革新政党、平和運動は包括され、情況を打ちやぶるべき原理を放棄した中で、〝閉塞的状況〟を打開し、自からの原理を貫く運動が提起されたとき、未来への先き取りの余りにも一条の光であった。またそれは閉塞的状況に身をおいたものはそれ故闘争として映った。

その衝撃を自らのうちに論理展開させるには、余りにも荷が重すぎるひとびと、自らのうちに深化させえたひとびとに極分化させずにはおれない。

〝自衛〟を何故とるのか。労働者、学生自身が自らの利益を守り抜くには、その斗い抜くには、自ら〝自衛〟する以外にない。国家は労働者、人民、学生の味方ではなく、敵対者であることを身をもって示した。何人もふみ込み得なかった、権力の領域へ自からの論理、行動展開をもって突き進んだがゆえに、権力は驚愕し、総力をあげて反撃を「合法性」と「民主制」のもとにいたるところ開始した。〝自衛〟は労働者が自己の闘いに不可欠なもの故に、権力はこの方向に貫き進むことを阻止しなければならない必要性が階級としてある。

強大な帝国主義国家権力は、反戦へ結集する労働者、人民へ苛酷な、非妥協的な圧殺する運動、プルジョアジーとしての階級をより明確に展開させている。

このような労働者、人民の反戦への結集を圧し潰す国家権力に対して、唯一の有効な手段は広範な貧困に陥められていく即ち労働力の商品化からの脱却としての運動に労働者の内的矛盾を根底とした運動へと展開するところの実力闘争以外ありえないのだ。反戦の実力闘争は、暴力を実行する体制の変革である。

しかし、労働者の政党と自認する社、共両党は、プルジョア国家体制「議会主義と対立」えず、議会主義の傾斜を度を強めている。日共が「反動勢力と極左的な反革命分子との衝突であり、わが党はトロッキストのこれらの行動を粉砕し、ベトナム侵略戦争反対の統一行動」とのたまうとき、一語一句が、労働者階級の政党、革命党としての存在を喪失させている。「暴力」は「悪い」、「極左、ハネアガリ、挑発」と道徳的思弱と権威主義に満ちた語句にかきられた二つの声明は、今日の日帝の総路線打ちだす情況を把え逆すことさえできないのである。

各国の労働者、人民の10・21への巨大な闘いは、国家への人民の抵抗へつき進まんとしている。ベトナム、ラテン・アメリカ、黒人学生、労働者の闘い、西独をはじめとする欧州各国にいたる所で反戦が展開され、支配階級が「先鋭化」したというほど、日本の反戦は国際的な闘いの結合に流れをとっている。今日世界の情況は、強化化対してプロレタリアートの闘いが要求されている。しかし社共両党は今日的な問題を把え逆すには余りにも形骸化してしまっている。そのことは、10・8赤旗マツリからスポーツ祭典に至るまでになる。

これらの現実は敷分が新しきものとして革命を醸成、始動させ、生みだすという一つの方式は、革命が戦争を廃絶する何らの道筋を生み出すということを提えず逆すことを拒否しているところから発する。そのときこそ〝結集しない、ブルジョアの政治体制が崩壊に瀕す」されれば「民主制議会主義」が表だってくれば、政治は人民からはなれていく。

議会制度が「発展しつつある資本主義の道具として、ある程度まで歴史的に進歩的な活動を行なってきた。だが横暴的帝国主義の現代の諸条件のもとにおいては議会は虚戦、偽瞞、暴行、厚顔無恥な冗言の道具に転化してしまい、国際的な戦争が局地戦争への転化した時、国家は権力の強化が「民主制」国家権力機関への抗議、四人の脱走兵、これらに対して「既成の理解の尺度に挑戦するなどのような性質」（朝日ジャーナル）と、市民主義的思考なら考えることもできない異常な出来事として、未来の不安の動揺をみせてくれる。

大多数の労働者、婦人などこう反応した。「佐藤首相はあのまでにしは訪ベト、訪米を何故しなければならなかったのか学生の気持はわかるが、もっと別の闘い方、方法があったのでは」と。良心的なインテリゲンチャと労働者は「学生が孤立して闘っているのは、自分達がしっかりしなければならないのだ」と反省する。だから「学生を孤立させないために、「佐藤訪ベト」に抗議やめきであ る」「国際新聞とプルジョア・イデオローグと、日共の〝狂った暴徒〟としてのキャンペーンに対抗しなければならない」と考えた。

国家権力は、羽田闘争が計画されたものであるとして、労働運動をはじめとする、労働者階級の闘争を弾圧する破防法の適用を模索し始め、各大学自治会を非合法化するため学校当局に呼びかけ方法を準備しようとする。これらは新たな日帝の総路線へ潜別的な大学を絶対として組み込んでいこうとするものである。日本的眼向をお奨めするための親と子の対話などまでをつけて。

現在世界至るところで起っている階級闘争が、同質的なものであり、世界的に結合をつつある国際的な階級闘争の新しい波は、プルジョア体制と直接対時しており、労働者人民は従来序体制から外へでることによってその普遍性を獲得できるのであり、プルジョア民主主義を擁護し、官僚的な、直接民主主義へ変革へ、自衛する必要がある。10・8、11・12闘われた羽田闘争は、階級闘争の中核としてダイナミックな変革へ力を結集されるものである。

羽田闘争統一弁護団、統一救対本部および全学連は「10・8羽田闘争救援アピール」を発表した。これは当者が10・8羽田闘争で傷ついた学生へのカンパなどの救援をよびかけたもの。

羽田闘争弁護団などの呼びかけ
救援カンパの訴え

アピール（要旨）

十月八日、羽田に集り佐藤首相のベトナム訪問阻止に立上った学生たちは、満身の抗議の意志をたたきつけました。

しかし、佐藤政府は国家権力とジャーナリズムを総動員した反暴力キャンペーンや、徹底した弾圧にのりだしてきています。山崎君の撲殺をれき死と強弁し真実のいんぺいに奔走しているのです。あの闘いで傷ついた学友はあまりにも多く、ある者は頭を割られ、ある者は警官に踏み倒されて全身打撲の重傷を負い入院しています。そして留置場にも多くの学友が不当に拘束されています。

私たちは学友を支援し、裁判斗争を勝利するために救援対策本部事務局を設置しました。この斗いを成功させるためカンパ活動に協力をお願いします。

なお、統一弁護団は、内田剛弘、前田和英、杉本昌純ら十七氏、統一弁護団十代田区丸の内二の一国労ビル三階小村法律事務所内・救対事務局中京都千代田区神田小川町三の二六中大学館気付。

エンタープライズ寄港を政府承認
11月2日、政府は閣議で米原子力潜艇の日本寄港を承認し、口上書・覚書を政府と交換した。これによって、ベトナム海域でベトナム侵略戦争に直接参加しているエンタープライズ原子力空母をはじめ、米艦隊が、24時間前の事前通告を以って日本寄港を狙うことなった。原潜寄港から質的にエスカレートした政治攻勢である。

11・10 大阪で 訪米阻止集会
11月10日大阪で「佐藤記者阻止三府県学生集会決起集会」が、中之島の剣崎公園において開かれ大阪市教職員組合のストライキをかちとった三百〇名を先頭に、反戦に結集する約三千の学生が、集結した。

羽田の時間的感覚の喪失
「限界」を考えた羽田闘争の敗北
11.12

ールポー

一切の幻想と常識から隔絶された一瞬の路上で、武装した因縁が激しく衝突し合った。この衝突の中に私も自らの肉体を張って、武装された肉塊に生きた。闘争が至上のリアルな姿を浮彫りにしている。今こうして原稿用紙に筆を走らせていると、あの闘争は私自身の生活と全く関係のない時間的感覚を喪失した別次元での出来事のように想起されてしかたがない。それは、丁度昨夜の悪夢が、翌朝になって二度、三度脳裏をかすめるあのようである。

はたして私には、持続した緊張があったのだろうか。私は何に敵対しようとしているのであろうか。様々な疑問がいまこうした苦痛を伴って自らの意識の深淵にせまってくるのである。私が一歩も歴史の頂点に近よろうとする根性があると自認すれば、あえてこのような命懸の問題から逃れたくはない。そしてそのことは、生き方をかけようとする人間に絶られた、思想の営為であるはずである。

言うまでもなく私は佐藤訪米作が進米する意図は知っている。そして結局は強権的弾圧に対抗しようとする本質も知っている。そしてまた暴徒集団よりわりする背後関係も知っている。しかし私には、そんなことはどうでもいいのである。

ある人達は「山崎君撲殺に抗議する」とヒステリックに狂乱している。私は、このような食い物に対して、国家権力の捜査は、手段を選ぶほどの政治的な圧力で、反戦闘争を弾圧することに、総力をあげて闘争した。

これに対して学生側は「機動隊に迫われた学生のうち空襲に向って右側の橋の上を逃げた学生は、置いてあった放水車と動いていない装甲車の間に追い込まれ、警棒服姿で撲殺された」として警察側の主張と対立した見解をとっている。

これは、橋のたもとで暴徒を見守っていた学生、〝平和〟労働者の目撃談の中に「山崎君が殺人の機動隊に囲まれて、警棒で殴だたきにあっているのを見た」と証言する人が多いことにもよる。

このように「撲殺」された位置について双方に著しい違いがあられるが、それをより鮮明にしているのは、死体に関しての警察側の発表に矛盾があることになる。

負傷した山崎君が最初に運び込まれた京大医学部附属病院の医長は「死因は頭蓋内出血」と明言していた小林茂名部の証言だけであるが、現在に至るまで、警察側は「一方的にこの証言を信じ、山崎君の死亡を学生による衝突事件として捜査すると発表した」と言っている。

警察側は「一度グリーンベルトにつきあたった学生の運転する装甲車がもとの所へ引き返す途中にひかれた」と一貫して主張している。この異常付になっているのは、弁天橋の空襲で負傷者運搬車の口から見ていた小林茂名部の証言だけであるが、現在に至るまで、警察側は「一方的にこの証言を信じ、山崎君の死亡を学生による衝突事件として捜査すると発表した」と言っている。

警察側は「一度グリーンベルトにつきあたった学生の運転する装甲車がもとの所へ引き返す途中にひかれた」と一貫して主張している。この異常付になっているのは、弁天橋の空襲で負傷者運搬車の口から見ていた小林茂名部の証言だけであるが、現在に至るまで、警察側は「一方的にこの証言を信じ、山崎君の死亡を学生による衝突事件として捜査すると発表した」と言っている。

警察側は「一度グリーンベルトにつきあたった学生の運転する装甲車がもとの所へ引き返す途中にひかれた」と一貫して主張している。この異常付になっているのは、弁天橋の空襲で負傷者運搬車の口から見ていた小林茂名部の証言だけであるが、現在に至るまで、警察側は「一方的にこの証言を信じ、山崎君の死亡を学生による衝突事件として捜査すると発表した」と言っている。

警察側は「一度グリーンベルトにつきあたった学生の運転する装甲車がもとの所へ引き返す途中にひかれた」と一貫して主張している。この異常付になっているのは、弁天橋の空襲で負傷者運搬車の口から見ていた小林茂名部の証言だけであるが、現在に至るまで、警察側は「一方的にこの証言を信じ、山崎君の死亡を学生による衝突事件として捜査すると発表した」と言っている。

警察側は「一度グリーンベルトにつきあたった学生の運転する装甲車がもとの所へ引き返す途中にひかれた」と一貫して主張している。この異常付になっているのは、弁天橋の空襲で負傷者運搬車の口から見ていた小林茂名部の証言だけであるが、現在に至るまで、警察側は「一方的にこの証言を信じ、山崎君の死亡を学生による衝突事件として捜査すると発表した」と言っている。

警察側は「一度グリーンベルトにつきあたった学生の運転する装甲車がもとの所へ引き返す途中にひかれた」と一貫して主張している。この異常付になっているのは、弁天橋の空襲で負傷者運搬車の口から見ていた小林茂名部の証言だけであるが、現在に至るまで、警察側は「一方的にこの証言を信じ、山崎君の死亡を学生による衝突事件として捜査すると発表した」と言っている。

警察側は「一度グリーンベルトにつきあたった学生の運転する装甲車がもとの所へ引き返す途中にひかれた」と一貫して主張している。この異常付になっているのは、弁天橋の空襲で負傷者運搬車の口から見ていた小林茂名部の証言だけであるが、現在に至るまで、警察側は「一方的にこの証言を信じ、山崎君の死亡を学生による衝突事件として捜査すると発表した」と言っている。

警察側は「一度グリーンベルトにつきあたった学生の運転する装甲車がもとの所へ引き返す途中にひかれた」と一貫して主張している。この異常付になっているのは、弁天橋の空襲で負傷者運搬車の口から見ていた小林茂名部の証言だけであるが、現在に至るまで、警察側は「一方的にこの証言を信じ、山崎君の死亡を学生による衝突事件として捜査すると発表した」と言っている。

警察側は「一度グリーンベルトにつきあたった学生の運転する装甲車がもとの所へ引き返す途中にひかれた」と一貫して主張している。この異常付になっているのは、弁天橋の空襲で負傷者運搬車の口から見ていた小林茂名部の証言だけであるが、現在に至るまで、警察側は「一方的にこの証言を信じ、山崎君の死亡を学生による衝突事件として捜査すると発表した」と言っている。

政治的な警視庁〝レキ死〟説、〝暴徒〟説
疑惑を深める政府、警視庁発表

山崎君の死因をめぐって
〝ボク殺〟（病院 弁護士 全学連）と〝レキ殺〟（政府、警視庁 商業報導機関 日共、民青）の対立

国家治安権力の暴力＝機動隊と国家権力の暴力に抵抗する学生、労働者によって佐藤首相訪ベトを中心とする東南アジア歴訪阻止の本質を知っている。そしてまた暴徒集団よりわりする背後関係も知っている。しかし私には、そんなことはどうでもいいのである。

ある人達は「山崎君撲殺に抗議する」とヒステリックに狂乱している。私は、このような食い物に対して、国家権力の捜査は、手段を選ぶほどの政治的な圧力で、反戦闘争を弾圧することに、総力をあげて闘争した。

これに対して学生側は「機動隊に迫われた学生のうち空襲に向って右側の橋の上を逃げた学生は、置いてあった放水車と動いていない装甲車の間に追い込まれ、警棒服姿で撲殺された」として警察側の主張と対立した見解をとっている。

これは、橋のたもとで暴徒を見守っていた学生、〝平和〟労働者の目撃談の中に「山崎君が殺人の機動隊に囲まれて、警棒で殴だたきにあっているのを見た」と証言する人が多いことにもよる。

このように「撲殺」された位置について双方に著しい違いがあられるが、それをより鮮明にしているのは、死体に関しての警察側の発表に矛盾があることになる。

負傷した山崎君が最初に運び込まれた京大医学部附属病院の医長は「死因は頭蓋内出血」と明言していた小林茂名部の証言だけであるが、ここでの検視の結果、牧田院長は「死因は頭蓋内出血」と明言していた。

しかし、その後山崎君は、学生の手から国家権力によって奪われ、「民主制」議会主義と対立えず、議会主義の傾斜を度を強めている。日共が「反動勢力と極左的な反革命分子との衝突であり、わが党はトロッキストのこれらの行動を粉砕し、ベトナム侵略戦争反対の統一行動」とのたまうとき、一語一句が、労働者階級の政党、革命党としての存在を喪失させている。「暴力」は「悪い」、「極左、ハネアガリ、挑発」と道徳的思弱と権威主義に満ちた語句にかきられた二つの声明は、今日の日帝の総路線打ちだす情況を把え逆すことさえできないのである。

私は問題に「一切の幻想と常識と肉化させることが、火炎にしかも永続的に問われている。

そのことは「自己矛盾の審取」であろう。そしてこの矛盾をいかに現代の時代的矛盾に相乗させるかである。では、われわれ自身の背負った矛盾はいかなるかたちで顕在化、あるいは潜在化しているのか。

おそらくわれわれの本質的矛盾は普段した概念の範疇である現実である。それは人間が生きる運命的ともいうべきものであるかもしれないが、それだけに人間の無限の可能性が保証されていると言える。がしかし現実はこうした人間の無限の可能性を圧殺しているという矛盾が、普段した概念の中に決定的作用をおよぼしているのである。その作用とは、一方の概念が他の概念を殺し、他の概念が「自己矛盾」を拡大し、「自己矛盾」を拡大しつつ、われわれは自らの矛盾の実践化したものを、永続的に社会の中に緊張関係として持続させるのである。

私は問題に「一切の幻想と常識から隔絶された……」と書いた。それは一般的に認められるものである。しかしそのことが私自身にとってそうであったかは、あらためて問題されなければならない問題なのである。だから、そうであったから私にとって時間的感覚を失ったものであったのか、それとも幻想と常識を払拭できなかったがゆえに感覚であったのかは、私にとって依然疑問である。

がともかくここで少々十一月二日羽田闘争のもっていた客観的な意味と主体的に接触した内容と闘争を支援して、各国人民、労働者は支援声明を日本に送り届けてきたという。これは、世界各国に帝国主義に対する実践的な反撃が展開されていることと、そうした日本の崩壊的傾向に生みだしている人民の闘いを、国家権力への否定の燃身自殺、四人の脱走兵、これらに対して「既成の理解の尺度に挑戦するなどのような性質」（朝日ジャーナル）と、市民主義的思考なら考えることもできない異常な出来事として、未来の不安の動揺をみせてくれる。

大多数の労働者、婦人などこう反応した。「佐藤首相はあのまでにしは訪ベト、訪米を何故しなければならなかったのか学生の気持はわかるが、もっと別の闘い方、方法があったのでは」と。良心的なインテリゲンチャと労働者は「学生が孤立して闘っているのは、自分達がしっかりしなければならないのだ」と反省する。だから「学生を孤立させないために、「佐藤訪ベト」に抗議やめきである」「国際新聞とプルジョア・イデオローグと、日共の〝狂った暴徒〟としてのキャンペーンに対抗しなければならない」と考えた。

国家権力は、羽田闘争が計画されたものであるとして、労働運動をはじめとする、労働者階級の闘争を弾圧する破防法の適用を模索し始め、各大学自治会を非合法化するため学校当局に呼びかけ方法を準備しようとする。これらは新たな日帝の総路線へ潜別的な大学を絶対として組み込んでいこうとするものである。日本的眼向をお奨めするための親と子の対話などまでをつけて。

現在世界至るところで起っている階級闘争が、同質的なものであり、世界的に結合をつつある国際的な階級闘争の新しい波は、プルジョア体制と直接対時しており、労働者人民は従来序体制から外へでることによってその普遍性を獲得できるのであり、プルジョア民主主義を擁護し、官僚的な、直接民主主義へ変革へ、自衛する必要がある。10・8、11・12闘われた羽田闘争は、階級闘争の中核としてダイナミックな変革へ力を結集されるものである。

羽田闘争統一弁護団、統一救対本部および全学連は「10・8羽田闘争救援アピール」を発表した。これは当者が10・8羽田闘争で傷ついた学生へのカンパなどの救援をよびかけたもの。

羽田闘争弁護団などの呼びかけ
救援カンパの訴え

アピール（要旨）

十月八日、羽田に集り佐藤首相のベトナム訪問阻止に立上った学生たちは、満身の抗議の意志をたたきつけました。

しかし、佐藤政府は国家権力とジャーナリズムを総動員した反暴力キャンペーンや、徹底した弾圧にのりだしてきています。山崎君の撲殺をれき死と強弁し真実のいんぺいに奔走しているのです。あの闘いで傷ついた学友はあまりにも多く、ある者は頭を割られ、ある者は警官に踏み倒されて全身打撲の重傷を負い入院しています。そして留置場にも多くの学友が不当に拘束されています。

私たちは学友を支援し、裁判斗争を勝利するために救援対策本部事務局を設置しました。この斗いを成功させるためカンパ活動に協力をお願いします。

なお、統一弁護団は、内田剛弘、前田和英、杉本昌純ら十七氏、統一弁護団十代田区丸の内二の一国労ビル三階小村法律事務所内・救対事務局中京都千代田区神田小川町三の二六中大学館気付。

エンタープライズ寄港を政府承認
11月2日、政府は閣議で米原子力潜艇の日本寄港を承認し、口上書・覚書を政府と交換した。これによって、ベトナム海域でベトナム侵略戦争に直接参加しているエンタープライズ原子力空母をはじめ、米艦隊が、24時間前の事前通告を以って日本寄港を狙うことなった。原潜寄港から質的にエスカレートした政治攻勢である。

11・10 大阪で 訪米阻止集会
11月10日大阪で「佐藤記者阻止三府県学生集会決起集会」が、中之島の剣崎公園において開かれ大阪市教職員組合のストライキをかちとった三百〇名を先頭に、反戦に結集する約三千の学生が、集結した。

10.21 国際反戦デー
米、反戦斗争〝抵抗へ質的転換〟
よりラディカルな運動へ〈世界各地〉

佐藤首相がサイゴン入りした21日は国際的反戦デーが展開された。

国鉄労組は十九日から、米軍基地、東京王子駅付近で軍需輸送拒否の闘争に入り、21日は浦安労組がベトナム向けの軍需物資輸送反対闘争に立ちあがったが、全体的は順法闘争などの消極的なもとに後退し、昨年を上回るオンパニア運動として終了した。

大阪では、大阪市大で、羽田闘争を支持する10・21大学行事のもとで教育法のストを敢行したほか、さらに総評、中立系組合、府学連ならびに五万人の反戦デモに参加した。午後二時半から梅町公園で公労協を中心に二万人が結集し、大阪府民集会が開かれた。

府学連の学生と合流し梅田中郵までデモ行進した。

途中梅田新道の交差点で、府学連組織されている。

アメリカ人とベトナム人を先頭とした約三万人のデモ行進が両の中で行われた。

【ニューヘンハーゲン】約八千人のデモ行進が行なわれ、米大使館前で米国旗十枚を焼いて、米のベトナム戦争政策に抗議した。警官隊の弾圧によって女性二人が負傷、入院している。

【西ベルリン】約一万人が結集しベトコンの旗を掲げて市の中心部を行進し市中平部の交通は完全にマヒした。

【アムステルダム】約一万五千人がデモ行進し、全市の交通は一時停止した。デモ隊はジョンソン大統領、ルンスオランダ外相に抗議電報を送った。このように、労働者によってラディカルに闘われた10・8羽田闘争は、日本の階級闘争の新たな局面を切り開くとともに、国際的連盟をかちえている。

おわび
当初企画しておりました学園祭参加のための新聞の発行が遅れましたことを読者各位に深くお詫びいたします。

主な原因は、過去三年間にわたる学園祭の、新聞に対する予算大幅削減という財政的弾圧措置により、新聞社の財政が慢性的に危機におちいり、印刷費の未納・滞納が重なり、このための印刷所との関係上であります。諸各位におかれましては、よろしく御了承くださるとともに、今後いっそうの御支援を賜わりますようお願いいたします。

古書籍全般売買
天牛本店
道頓堀中座前
電話(211)三五八・九番

オトコが えらぶ！ オトコが 決める！ ナイスタイプ整髪料
丹頂マイコーム〈スペシャル〉
●ミクロ乳化整髪料
●100g 300円　●60g 200円
❶ベタテカしないでバラつかない　❹毛の質に関係なし
❷ドライヤー効果をフル発揮　❺洗髪は1回で完了
❸ハンディなポリ・チューブ入り　❻男らしい香り
新発売
丹頂株式会社

トヨタ パブリカ スーパー
トヨタ パブリカ スペシャル
新発売
進歩のマーク TOYOTA
トヨタパブリカ京都株式会社
本社　京都市南区吉祥院石原上川原町1番地　TEL 大代表 (69) 7171番
京都上営業所　京都市北区紫竹下本町55の5　TEL 代表 (49) 2151番
京都中営業所　京都市中京区寺町通三条角　TEL (22) 3567番
洛南営業所　宇治市槙島町本屋敷149の2番　TEL代表宇治 (07742) 4161番
舞鶴営業所　舞鶴市字京田小字大角140の1　TEL代表舞鶴 (07736) 5-4191番

実務と学習に最適の六法
〈編纂〉末川博
岩波基本六法
—比較参照＝各国・新旧法令
参照条文・総合事項索引付—
昭和43年版　発売！
生協で取扱っています。

現代感覚漲る文化語学誌
時事英語研究
○映画台本研究　「下り階段をのぼれ」
12月号　一八〇円
英文▶反抗するアメリカの若者たち
▶変貌する世界での行動と個人問題
▶街で見た英語の実態／国際見本市の巻
▶貿易英文通信ゼミナール▶英字新聞読語▶青い目の見た明治百年▶経済時事英語研究▶英語街漫歩▶サンフランシスコ通信▶新語展望▶商学質問箱▶歴史問題
▶日本時事英語学会第九回年次大会記録

広い視野・実力の源泉
英語研究
■特集・現代文独習＜現代文独特の感覚を体得する読解講座と現代語法とテクニックを身につけるための作文講座＞
▶今年度観光ガイド試験問題研究と傾向
▶現代英語の表情▶現代英語としての新聞英語▶語法診断▶演習講座など
▶英文読書・スタンフォード大学訪見
■懸賞論文入選発表■イギリス文学新潮
●映画台本研究・To Sir With Love
12月号　一五〇円
東京都新宿区神楽坂一の三　研究社　全国書店取扱中

帝国主義的再編に呼応する大学

論説

反戦斗争の現況に注視せよ
既成平和運動の腐敗的根底的な打開を！

ベトナム戦争はアメリカ帝国主義が〝黒船ハイ〟への進行孫悟空を断行し「既に暴発自然はなくなった」と、朝鮮戦争をしのぐ激烈な規模を背景として拡大の一途をたどっている。そして中・ソの参戦、「宣戦布告」なき反革命＝反「共」戦争と位置づけ体制をかけたアメリカ帝国主義の軍事的進行とともに、「米中対決」の危機をより一層高めている。

このように一層激化するベトナム戦争に対して、佐藤首相の訪韓以降訪問、東南アジア歴訪、それの集約としての訪米はアメリカ帝国主義の極東政策＝ベトナム戦争をめぐっての、軍事、政治、経済における全資本主義体制と日本資本主義の緊密な協力関係の構築として断行されるのである。かかる課題を荷なう佐藤首相の一連の歴訪は社共の「戦争にまきこまれる」との反対、更に対中国関係からの反対説を無視し、（それら前提であることを看破し）訪ベト訪米を国家権力を結集させて貫行したのである。まさしくこの一連の歴訪はベトナム戦争への一層の協力、加担で、これを媒介とした日本帝国主義の海外進出、東南アジアを其同体としてナショナリズムで包括するものであった。

10・8佐藤首相の南ベトナム訪問を中心とする第二次東南アジア歴訪、11・12欧米阻止のための、全学連をはじめとする革命的左派の学生、労働者への日帝の反労働者性を露骨に現出し、その結力をもって、羽田空港入口の防禦であり、装甲車、警棒の乱打、ガス銃の発砲を含む空前の暴虐極まる暴力的大弾圧をもって対決した。それは平然と、京大生山崎君を虐殺し、百人以上の逮捕者、六百人以上の重軽傷を出し、中央大、法政大、早大などへの官憲導入と徹底した大弾圧を加えた。

国家権力は御茶新聞をはじめ、既成の一切の知識人をも動員し「民主制」を強調するものと反学生運動反暴力キャンペーンのほう大な秩序暴力を、公共性＝支配体制の維持のもとに強化させ、70年安保の実体的プランを提起し、訪ベト訪米としての承認を大衆に迫まった。

さらに核心的なことは、既成党派には最早阻止闘争を組織しうる力量はないとさえある。「革新」の破産したことを大衆的に現出した。

日共＝民青の10・8の「赤旗まつり」であり、支配体制の打ち出す反学生運動、反暴力キャンペーンに「トロッキストの挑発的行動が学友を殺した。今こそ学生戦線からこうした暴力と挑発集団を追放しよう」と国家権力の暴力を承認した反動的姿を大衆の面前に鮮明に明確にさせる日共＝民青。このような10・8、11・12羽田における佐藤訪ベ訪米反対阻止闘争は、一切の既成左翼の闘争放棄と反動的裏切をあまなく明確に暴露させた。

かかる既成左翼の腐敗に助けられて、訪ベト、訪米を其徹していったのであり、日米安保共同防衛力増強であり沖縄、小笠原問題を中心として、70年安保を提起しているのである。

(2)

ベトナム戦争、沖縄問題などの軍事的、政治的関係を延長に、米帝の日米安保条約の強固に対し日帝の「米戦争」以外の「後進国」の闘争の分断と経済的援助をすすめる。

それは現憲法の制約を「理想」とはねのける諸政策を実現するために、これを関与するための必要条件の小選挙区制を強行、一方労働運動の一層の右傾化をはかり、反国家、反体制運動には破防法の適用を計り国家権力によって粉砕するなど具体的な実施へ歩を確実に進行させている。

このような日共の米帝に対する日帝の従属から導びきだされる諸々の現象は無原則な譲歩を展開させている。そしてそこから民族主義的色彩はそれ故ブルジョワ的改元反対の極にあり、民族主義を幻想としてえがくブルジョワの体制の高度化に後退化現象を起こす。社会党は佐藤首相の訪米を「平和外交」「国民的利益」を対象し議会闘争への補完物として国民運動を把握する。

これらは「70年安保決戦」への国民の支持を高めるためとのうがった見方もあるが、問題なのは、〝70年〟をクローズアップさせることは単なる安保「条約」に反対するといったところにあり、反体制闘争といった真の変革的な闘争といえるものでなく体制内化した社民の談合主義化への脱落なのである。これでは現実の貧困疲弊する情況に対して思想以前の問題物でしかありえない。われわれにとってその支配体制を左から支える民族主義で対応しようとしている。日共は沖縄問題を「日本民族の独立」として掲げている。

敗戦の日本を、アメリカ帝国主義への従属下で再び帝国主義として自立化の時代は沖縄の法的に位置付けられたサンフランシスコの講和条約によって終りをとげ、自立した日帝は「安保」「三池」を乗り切り「日韓」「原潜」を乗り切り、70年安保への強固な体制を緊密化しているのである。

それは現憲法の制約を「理想」とはねのける諸政策を実現するために、これを関与するための必要条件の小選挙区制を強行、一方労働運動の一層の右傾化をはかり、反国家、反体制運動には破防法の適用を計り国家権力によって粉砕するなど具体的な実施へ歩を確実に進行させている。

このような日共の米帝に対する日帝の従属から導びきだされる諸々の現象は無原則な譲歩を展開させている。そしてそこから民族主義的色彩はそれ故ブルジョワ的改元反対の極にあり、民族主義を幻想としてえがくブルジョワの体制の高度化に後退化現象を起こす。社会党は佐藤首相の訪米を「平和外交」「国民的利益」を対象し議会闘争への補完物として国民運動を把握する。

これらは「70年安保決戦」への国民の支持を高めるためとのうがった見方もあるが、問題なのは、〝70年〟をクローズアップさせることは単なる安保「条約」に反対するといったところにあり、反体制闘争といった真の変革的な闘争といえるものでなく体制内化した社民の談合主義化への脱落なのである。これでは現実の貧困疲弊する情況に対して思想以前の問題物でしかありえない。われわれにとってその支配体制を左から支える民族主義で対応しようとしている。日共は沖縄問題を「日本民族の独立」として掲げている。

敗戦の日本を、アメリカ帝国主義への従属下で再び帝国主義として自立化の時代は沖縄の法的に位置付けられたサンフランシスコの講和条約によって終りをとげ、自立した日帝は「安保」「三池」を乗り切り「日韓」「原潜」を乗り切り、70年安保への強固な体制を緊密化しているのである。

(2)

ベトナム戦争、沖縄問題などの軍事的、政治的関係を延長に、米帝の日米安保条約の強固に対し日帝の「米戦争」以外の「後進国」の闘争の分断と経済的援助をすすめる。

それは現憲法の制約を「理想」とはねのける諸政策を実現するために、これを関与するための必要条件の小選挙区制を強行、一方労働運動の一層の右傾化をはかり、反国家、反体制運動には破防法の適用を計り国家権力によって粉砕するなど具体的な実施へ歩を確実に進行させている。

このような日共の米帝に対する日帝の従属から導びきだされる諸々の現象は無原則な譲歩を展開させている。そしてそこから民族主義的色彩はそれ故ブルジョワ的改元反対の極にあり、民族主義を幻想としてえがくブルジョワの体制の高度化に後退化現象を起こす。社会党は佐藤首相の訪米を「平和外交」「国民的利益」を対象し議会闘争への補完物として国民運動を把握する。

これらは「70年安保決戦」への国民の支持を高めるためとのうがった見方もあるが、問題なのは、〝70年〟をクローズアップさせることは単なる安保「条約」に反対するといったところにあり、反体制闘争といった真の変革的な闘争といえるものでなく体制内化した社民の談合主義化への脱落なのである。これでは現実の貧困疲弊する情況に対して思想以前の問題物でしかありえない。われわれにとってその

学園造りの今日的問題を〝将来は判らない〟学費値上げ

大学の財政的危機と社会的経済論説で過去任期中二回にわたる学費値上げを見徹した中谷学長が、再度学長の席に返り咲いて登場してしまったことは、われわれにとって現在大学にとって何が問われているのかをより一層深化させる必要があろう。

過去任期中「Support but not Controll」という名言(?)をしばしば口にした中谷学長は、「ひものつかない国庫補助の大幅獲得」の方針を一体どれだけ達行したといえるのか。

激しく現象する現在の〝私学の危機〟は、単なる財政危機に留まるものではない。大学の規模拡大によって変遷する財政危機を私学当局は学生大衆へ負担を全面的に転嫁することによって、学生の犠牲の上に関大の規模を全面的に拡大化させる一方、大学人の安易な国家政策への迎合を生み（これは「社会の要請」を大義名文とした学部学科の新設に顕著に表われ）大学の空洞化を押し進めていることである。

高度経済成長の終焉とともに戦後民主主義が終焉し、本格的な帝国主義に突入、あらゆる方面での帝国主義的再編が急速に進められ、大学の内外において、われわれの生活の存立が根底からおびやかされている今日、大学はそれらの圏外に非歴史的、抽象的に存立しないのであり、この絶体から大学をとらえなおさねばならない。

中谷学長が過去任期中に行なったことは、記者会見でも発言しているように関大の規模の拡大＝学部学科の新設、関大会館＝のための、学費値上げであり、それを具体化したのが森川前学長であったわけで十数億の赤字を現出させた。関西大学を緊急大学として大学の将来のため学生に展望させる緊張性の上になった当局のボリシイであった。

関西大学は、日本資本主義の新しい局面の転回と帝国主義への突入において新興大学は二つの改革に直面しながら「社会の要請」のもとに資本に順応する方向へ位置づけられていくのである。

〝大学〟の位置を総体的にとらえかえす必要性

こういった大学人による〝大学の担当状況とこれを認知しない教授陣学生の状態〟を〝私学の危機〟の実体であるとしても「Support but not Controll」という名言(?)を単なる財政危機のもとに容易に転嫁するのは日本帝国主義の再編の開始による大学の支配を、個別な大学の財政上の危機にしぼりあげ、「学園あっての私」のもとにのりきろうとする意図がある。大学の要求に対してアカデミニズムの民間資本を使ってというスローガンの方が関大の無数な組織からさえも打開できるものだ。「ひものつかない国庫補助の大幅獲得」との方針をうちだしているが、一関西圏のひものつかない」国庫補助をという中谷学長が、この言葉を民間資本に理解できるとするならば、〝私学の危機〟の実体構造を緊密な理論に発展させ御周知のことであろう。

補助に代る学生組織的補助機関が公然と大衆の前に公表されてきている。それを当局の手もって「自治」と明るく楽しい学園の創造」に集約していこうというわけである。

学長自身が持つ教学ビジョンは学生を生徒として位置付け、大学を学生内なるものとしての自主性を犠牲にしてまで、学生の自主性を無視し、（それら前提であることを看破し）訪ベト訪米を国家権力を結集させて貫行したのである。まさしくこの一連の歴訪はベトナム戦争への一層の協力、加担で、これを媒介とした日本帝国主義の海外進出、東南アジアを其同体としてナショナリズムで包括するものであった。

10・8佐藤首相の南ベトナム訪問を中心とする第二次東南アジア歴訪、11・12欧米阻止のための、全学連をはじめとする革命的左派の学生、労働者への日帝の反労働者性を露骨に現出し、その結力をもって、羽田空港入口の防禦であり、装甲車、警棒の乱打、ガス銃の発砲を含む空前の暴虐極まる暴力的大弾圧をもって対決した。それは平然と、京大生山崎君を虐殺し、百人以上の逮捕者、六百人以上の重軽傷を出し、中央大、法政大、早大などへの官憲導入と徹底した大弾圧を加えた。

国家権力は御茶新聞をはじめ、既成の一切の知識人をも動員し「民主制」を強調するものと反学生運動反暴力キャンペーンのほう大な秩序暴力を、公共性＝支配体制の維持のもとに強化させ、70年安保の実体的プランを提起し、訪ベト訪米としての承認を大衆に迫まった。

さらに核心的なことは、既成党派には最早阻止闘争を組織しうる力量はないとさえある。「革新」の破産したことを大衆的に現出した。

日共＝民青の10・8の「赤旗まつり」であり、支配体制の打ち出す反学生運動、反暴力キャンペーンに「トロッキストの挑発的行動が学友を殺した。今こそ学生戦線からこうした暴力と挑発集団を追放しよう」と国家権力の暴力を承認した反動的姿を大衆の面前に鮮明に明確にさせる日共＝民青。このような10・8、11・12羽田における佐藤訪ベ訪米反対阻止闘争は、一切の既成左翼の闘争放棄と反動的裏切をあまなく明確に暴露させた。

かかる既成左翼の腐敗に助けられて、訪ベト、訪米を其徹していったのであり、日米安保共同防衛力増強であり沖縄、小笠原問題を中心として、70年安保を提起しているのである。

(2)

ベトナム戦争、沖縄問題などの軍事的、政治的関係を延長に、米帝の日米安保条約の強固に対し日帝の「米戦争」以外の「後進国」の闘争の分断と経済的援助をすすめる。

それは現憲法の制約を「理想」とはねのける諸政策を実現するために、これを関与するための必要条件の小選挙区制を強行、一方労働運動の一層の右傾化をはかり、反国家、反体制運動には破防法の適用を計り国家権力によって粉砕するなど具体的な実施へ歩を確実に進行させている。

このような日共の米帝に対する日帝の従属から導びきだされる諸々の現象は無原則な譲歩を展開させている。そしてそこから民族主義的色彩はそれ故ブルジョワ的改元反対の極にあり、民族主義を幻想としてえがくブルジョワの体制の高度化に後退化現象を起こす。社会党は佐藤首相の訪米を「平和外交」「国民的利益」を対象し議会闘争への補完物として国民運動を把握する。

これらは「70年安保決戦」への国民の支持を高めるためとのうがった見方もあるが、問題なのは、〝70年〟をクローズアップさせることは単なる安保「条約」に反対するといったところにあり、反体制闘争といった真の変革的な闘争といえるものでなく体制内化した社民の談合主義化への脱落なのである。これでは現実の貧困疲弊する情況に対して思想以前の問題物でしかありえない。われわれにとってその

学長の学園づくり
〝清潔で明るく楽しい学園づくり〟
教育工場関大のソフトムード化

全国私学連が圧力団体的に政府文部省に自民党に「国庫補助要求」を行うことは、財政を基軸により一層の国家支配統制の確立であろう。政府が支払うべき労働力再生産費を政府に要求するものであり〝大学の危機〟をとりかえすものではない。

学費は昭和四十三年度は値上げしないことになっているが、膨脹した設備などは一万〜二万の値上げを呈している。それが将来はわからない」というほど大学を財政の危機の深さを表現しているといえるだろう。

私学は、学長のいう国家の厚代りを一面で行なっているといえる。それは、私学の財政を、国家権力の強化の前に内的な反撃の音をたてるのを表現しておる各大学に「一」という理由で、学生の自主性の本質を制御とる、教育的個人的なもうそうを、もうそうとしてもうもうとしてもうもうとしてもうも

ベトナム反戦闘争の国際的結合

「平和共存」を拒絶し戦闘性・革命性の回復

鶴嶋雪嶺

十月二十一日、わが国でも、多くの労働者・学生が、ベトナム戦争反対国際統一行動デーに参加した。これは直接に参加できなかった者でも、二十六日の共闘などを闘うなかで、自らの闘争を国際統一行動と結びつけて考えていた者は多い。これから沖縄返還闘争、エンタープライズ寄港阻止闘争がもり上がるなかで、十月二十一日闘争の意義は、さらに広く、深くわが国の労働者、学生に自覚されていくことであろう。

いうまでもなく、十月二十一日闘争は、わが国独自の団体によってのみ提起されたものではない。総評や全国労戦などが、アメリカの平和団体や黒人組織、フランスの全国ベトナム委員会、イギリスのベトナム連帯委員会などからの呼びかけに応じて、これに参加を決定したものである。これが大衆的規模で闘われたことは、わが国においては、まったく画期的なことである。わが国では、政府も人民もいろいろな事情から、外国の知識にうとく、世界的問題にたいして鈍感である。ロシア・中国革命との決定的なちがいは、いずれもその革命が勝利してから後に開始されたにすぎず、調整革命が帝国主義軍の干渉を受けた際には日本労働者、学生の大部分は一中立」の旗印のもとに沈黙し、キューバのカストロ運動、アルジェリアの放棄戦線の死闘にたいしては、ほとんど正確な知識もなかったといってよい。インドネシアのナサコム体制が軍部のクーデターによって崩壊した時には、日本政府は新しく出現した軍部政権にいち早く経済援助をあたえてアジアの反共体制強化に協力するとともに日本のインドネシア進出の足場を固めたけれども、日本の労働者、農民は、インドネシアの労働者、農民が、数百万人という莫大な数で虐殺されていくのをまったく無視してしまった。このように、これまで国際的問題にたいしてあまり反応示さなかったわが国の労働者が、いまベトナム人民の英雄的闘いに鼓舞されて、世界的にこの人民を支持し、支援する統一行動に参加するようになったのである。

ところで、十月二十一日に、ワシントン、モントリオール、ロンドン、ブラッセル、オスロ、コペンハーゲン、ベルリン、ジェノアなどでくりひろげられたベトナム戦争反対の集会、デモは、その行動形態において共通する二つの特徴をもっていた。ワシントンでノーマン・メーラー、ディヴィ・デリンジャーなど、オーグランドでジョーン・バエズなどが逮捕されたように、各地で激しい抗議の形態がとられたのである。これは決して過然なことではない。十月二十一日国際統一行動を積極的に推進してきた団体は、アメリカの社会主義同盟や「ラディッシズ」に反対する青年組織」、フランスの全国ベトナム委員会、イギリスのベトナム連帯委員会など、いずれも、ベトナム人民支援活動を具体的に行い、その勝利のためにベトナム以外においても帝国主義にたいする闘いを強化しなければならないという立場をとっているものである。平和運動・反戦運動を、単に存在する平和を擁護したりするものとしてではなく、平和を犯しているものに闘いの行動を起し、戦争の根源を取り除こうとするものとして展開している団体だからである。したがって十月二十一日の国際統一行動は、これまで非常に抽象的なものとしてしか理解されなかった平和と国際主義を、きわめて具体的な闘いの問題として把えかえし、その闘争を通じて結びついていっているということができよう。反戦闘争は、抽象的な平和を新聞するものとして存在していた状態を脱して、その戦闘性・革命性を回復し、帝国主義は、各国代表が伸よく喧嘩しあう祝宴としてではなく、闘いの行動を通じ、そこから生まれる共同の社会を目指して、ベトナム人民の英雄的闘いの問題と、経済的後進国と先進国のそれぞれについて見てみよう。

ラテン・アメリカ人民連帯機構とベトナム闘争

ベトナム人民の英雄的闘争が直接に大きな影響をおよぼしているのは、植民地、後進国における解放闘争である。三大陸の人民は、ベトナム人民の不屈の闘いに鼓舞されて自らの解放と支援を自らの闘いの発展、深化によって遂行しようとしている。このことを端的に示すのがラテン・アメリカ人民連帯機構ハバナ会議である。

七月にラテン・アメリカ二十七ヵ国から一六五人の代表を集めて開催されたラテン・アメリカ人民連帯機構ハバナ会議は、直接に、「第二、第三のベトナムを世界中に」というチェ・ゲバラの呼びかけに呼応して開かれたものである。そして、ベトナムと同様の解放闘争をラテン・アメリカに行うことによってベトナム人民を支援しようとする立場が、チリーなど三カ国の代表だけを除いて、二十四ヵ国の代表によって確認されたのであった。

会議の一般的宣言は、ラテン・アメリカ人民の独立と解放闘争からの解放および社会主義をめざす経済的社会的発展を武装闘争によって実現することを謳っているが、これは、ラテン・アメリカのブルジョア・地主の支配制と平和共存することにつとめるソ連の外交路線およびこれに追随してブルジョア・地主に屈服したラテン・アメリカ諸共産党との対決を通じてのみ克服されるものである。カストロは、国際主義が尊敬に値するものとして存在する後進は、各国の解放闘争をおしつぶしていこうとする政府を投射しようとしたといって、チリー、ブラジル、コロンビアの政府に年間六千万ドルから一億ドルの経済援助をあたえているソ連外交路線を痛烈に批判した。そして、レオニ政府に屈服して平和革命を説いた共産党書記長ゴルバラなどのボイコットにもかかわらずハバナ会議が成功したことは、ラテン・アメリカの解放闘争がもはや数的にもカストロ＝ゲバラ路線に移ったことを示すものであろう。

このような、平和路線を掲げて、植民地、後進国のいわゆる中立政府との闘争を通じて自らの解放を図ろうとする路線は単にラテン・アメリカだけでなく、中近東においても急速に発展しつつある。中東戦争によってナセルの影響がすくなっていおのは、このようなアラブ民族解放闘争の主力が、もはやナセル的中立路線をこえたことを基礎にしているのである。ナセルなどによる統一アラブの強調は、この大衆的突き上げをおそれるものの表ばかりにすぎない。

ラテン・アメリカ人民連帯機構

ハバナ会議は、このようにベトナム人民の英雄的闘争に鼓舞されて自らの解放を自らの武力によって闘いとろうとする三大陸のゲリラ闘争がその闘いを通じて国境を越えた結束を求めつつあることを示すものなのである。ラテン・アメリカ人民連帯機構が十月二十一日の国際統一行動デーのために非常に積極的に動き、また十月八日羽田における闘いにキューバがいちはやく連帯の意思を表明したのもこのためである。

（著者は本学経済学部助教授）

黒人運動とニュー・レフト

ニュー・レフトの萌芽

公民権、反戦を中心として"アメリカ"とは何か

アメリカ帝国主義は、「太平洋国家」の旗のもと、アジアにかつてない大規模な新植民地主義による攻勢を積極的に、経済的に展開している。ベトナムにおける侵略戦争を基軸に、国際資本主義体制をかけ猛烈な北爆にそれは象徴される。一方米帝国主義国内においては「ニュー・レフト」と呼ばれる一連の動きが反戦を中心としてラジカルに展開されていることを見のがしてはならない。

公民権運動を分岐点としてこれに隣接した新左翼運動は、第二次世界大戦後の大恐慌を契機にあたっては、国防強化のもと、軍事、経済化、中産階級層（CIA、国防総省の軍などの反共勢力）の拡大、新植民地主義を強化しつつ進められてきている。それはベトナムにおける米帝国主義における侵略闘争が、「第三世界」の解放闘争に対して、「自国主義」の旗のもとに、「反戦」を掲げ、「自由と民主主義」を叫び、「人種差別撤廃」を叫び、「貧困」を叫び、「戦争」を叫び、「人種差別

脱獄の美学

＝川桐信彦＝

（筆者は）美的実存者の最も激烈なあり方としての方法である「脱獄の美学」について、これまでくりかえした点をさらに強調するが、美学的実存は、あくまで洗練された知的な存在のエネルギーを必要とするのである。ギリシャ人が遠走に目指した知的肉体的強者の姿勢から、キルケゴールが指摘した「美的実存は躍視し、更にその美的実存の持つ行動性と目的性について分析を深める用意がある。

筆者は、これまで宗教的人間、特に神学に根ざした人間学、ニーチェ流に痛罵した。そこには禁書な意味での美しさを欠き、人間を醜悪なものとして内的にも外的にも把握してかえりみない姿勢に対する体験的批判を生み出しているからである。更に、現在の時点で文化人とされている存在の、これまでの背々たる努力には感慨を表するが、はたして彼ら自身の生み出すものが、われわれを十分に満足させているかについて、強度に否定的見解を述べた。最近ベートーヴェンの生涯を記念して様々の作品が電波やレコードを通してわれわれに提供されているが、音楽的内的価値を認めるにしても、現在の時点のわれわれに何を発揮しうるかの問題は、まだ疑問である。また、佐藤栄作のベトナム

書評

「唯物観史と現代」（岩波新書）

梅本克巳

今日のマルクス主義

「唯物史観と現代」は、小冊子とはいえ、氏が戦後ジャーナリズムをにぎわした「主体性論争」の主要な旗手として以後一貫して追究して飽まない課題、即ち歴史の流れの意味、唯物論における人間の課題を展開しようとするものである。「唯物論と主体」「人間論」「マルクス主義における思想と科学」「過渡期の意識」を集約し、戦前の唯物史観に根ざした思想的課題の核心に答えようとしたもの。

氏の立場論の方向性は明確である。「唯物史観」は、スターリン主義とともに崩壊して、もはや人間の回復にとっては何の指針も与えることの出来ない死物だということになる。が、果してそういうことになるのかどうか。この問題にしても、ただ現実の推移を追いかけていただけでは何の解答も見出だされはしない。またこの問題の中から、私たち自身の問題を引き出すことも出来ないわけである」

「今日のマルクス主義の危機は一国社会主義が自から生み出した矛盾の頂点で崩壊し、その崩壊の過程に生み出された現実の物質的諸条件の中での苦闘の産物である。それぞれの指導者たちが、マルクス主義の立場への回帰をめざして意識しているものと、かれらの意識にはのぼっていないものとは区別されていかねばならない。それを区別する方法的見地もそなわらねばならない。理論的思想家の方法とその方法の主音となる歴史観である」

思うこの小冊子の中心的な問題は、戦後、二・一ゼネストの挫折、四九年闘争の大敗北、五十年のコミンフォルムによる自己批判、国際派と所感派の対立、六全協、ハンガリー動乱、スターリン批判、砂川、教職員闘争、安保闘争、中ソ論争対立、反戦闘争といなるところで如実にみられた運動における主体的原理の喪失ということ。これが日本だけの現象ではなく、戦後著しく発展した資本制社会の特徴であるが、ところが事態は社会変革への後をますます彼岸的に追放させ、特に自主独立路線への展望の日本共産党の事態はますます混迷させるようなプラグマチックな修正によってその日々ごとにかえられるマルクス主義思想の創造的全体性の喪失の意味に氏は対決してきた日本の数少ないマルクス主義哲学者の一人である。

このように小冊子は、スターリン主義に典型的に表われているマルクス主義の退廃、そして危機の根源に〝出口なし〟の情況へ挑戦する。

このことはマルクス・レーニン主義の原理（弁証法）を外的対立の規定として、今日、マルクス主義とは一体何なのかを内部的に鋭くつきだそうということである。

しかし、著者は今日のマルクス主義の危機の原因を、それ自体がマルクス主義の〝原理〟の修正である「国際革命の課題にしてもっぱらロシア一国の利益擁護の問題にすりかえられ、他国の革命はすべてロシア一国の利害によって調整され」に端的に現われたスターリンの「一国社会主義論」（一国だけでも社会主義の実現は可能という確力による〝原理〟）のまっ殺と「反社会主義的傾向を社会主義的なものを強弁するためのさまざまの偽造理論」）が必然的に生み出されるとみる。それは矛盾の中で、マルクス主義の原理が窒息化されたそしてこの現実をふまえて、マルクス主義の原理の再把握を通じて人間性と革命と思想の復権であると規定する。それは結びついている資本主義支配体制のいちじるしい発展と「安定」に、正統派の退嬰的情況を展開し続ける現在の思想状況に、闘争機会主義において、支配者階級の永久と支配的となる思想の物質的根拠、とくにイデオロギーの終焉論に端的に表われているマルクス主義批判を断罪しようとするのだが、外的現象に足をすくわれて感じて氏のモーチフはその平易な、整理された文体から感じさせるほど少くともほぼ緩慢いのだ。

・思弱的に、マルクス主義のとらえかえし

この小冊子は、〝疎外〟論へ下向し、歴史にわたり易いように章が組まれている。初期マルクス主義の成立についてである。

「第一章」において、ニーチェが十九世紀に予言したニヒリズムの到来の状況が語る。「人間のつくり出したものが人間の手を離れて独立し、逆に人間の自由を束縛してくるという現象がおこってくるのも、本来社会関係というものがそういうものだからであるのである。」と、疎外論の問題は、階級社会における関係の矛盾の発生する時代状況を言う。そしてこれを包括した形で、「十九世紀に神が死に、二十世紀に人間が死んだ、いま人びとはその死んだ人間をよみがえらせようとして代りに国家への回帰や宗教の必要が説かれているわけだが、国家や宗教がそもそもどんな役割を果たしたのだろう。

この問題は、唯物史観がその矛盾を解決しうるとしてとりくんでいる問題である。」と、この小冊子の中心の中心問題、即ち唯物史観を提示する。

「第Ⅱ章」においては、唯物史観の基礎問題を解明していき、スターリン主義の崩壊、その過程が生み出しつつある問題の集約の危機的情況の根源的追究を、哲学の形で整理し、乗り越えようとする。ここはマルクス主義の復権！

機械的解釈によるプラグマティズムを排し、階級社会の現代にとってのマルクス主義の原理の復権へのエネルギッシュな闘争とともに「哲学における前衛党の問題―哲学における人間と政治」の章等に答えようとする。

「第三章」において、ニーチェ流の「疎外論」論へ下向し、歴史にわたり易いように章が組まれている。初期マルクス主義の成立についてである。

「第一章」において、ニーチェが十九世紀に予言したニヒリズムの到来の状況が語る。「人間のつくり出したものが人間の手を離れて独立し、逆に人間の自由を束縛してくるという現象がおこってくるのも、本来社会関係というものがそういうものだからであるのである。」と、疎外論の問題は、階級社会における関係の矛盾の発生する時代状況を言う。そしてこれを包括した形で、「十九世紀に神が死に、二十世紀に人間が死んだ、いま人びとはその死んだ人間をよみがえらせようとして代りに国家への回帰や宗教の必要が説かれているわけだが、国家や宗教がそもそもどんな役割を果たしたのだろう。

この問題は、唯物史観がその矛盾を解決しうるとしてとりくんでいる問題である。」と、この小冊子の中心の中心問題、即ち唯物史観を提示する。

「第Ⅱ章」においては、唯物史観の基礎問題を解明していき、スターリン主義の崩壊、その過程が生み出しつつある問題の集約の危機的情況の根源的追究を、哲学の形で整理し、乗り越えようとする。ここはマルクス主義の復権！

「第Ⅲ章」では、「ブルジョア社会の解剖と疎外論」について、人間と労働とを結びつけて追究している。

そしてプロレタリアートの内的矛盾の展開、媒介を通じて、共産主義的人間とは必ずしもそのようなものではないという課題の深刻に深くきりひらいていく。それは、一人の人間にとっての世界観とは、何か、思想とは何かを問う。

プロレタリアートにおいてこそ哲学が存在することを解明する。

「第Ⅳ章」では、「ブルジョア社会の解剖と疎外論」について、人間と労働とを結びつけて追究している。

そしてプロレタリアートの内的矛盾の展開、媒介を通じて、共産主義的人間とは必ずしもそのようなものではないという課題の深刻に深くきりひらいていく。それは、一人の人間にとっての世界観とは、何か、思想とは何かを問う。

プロレタリアートにおいてこそ哲学が存在することを解明する。

「第Ⅴ章」では、「ブルジョア社会の解剖と疎外論」について、人間と労働とを結びつけて追究している。

そしてプロレタリアートの内的矛盾の展開、媒介を通じて、共産主義的人間とは必ずしもそのようなものではないという課題の深刻に深くきりひらいていく。それは、一人の人間にとっての世界観とは、何か、思想とは何かを問う。

プロレタリアートにおいてこそ哲学が存在することを解明する。

「第Ⅵ章」では、今日のマルクス主義の危機の原因を解明していき、スターリン主義のコミンフォルムによる自己批判、国際派と所感派の対立、六全協、ハンガリー動乱、スターリン批判、砂川、教職員闘争、安保闘争、中ソ論争対立、反戦闘争といなるところで如実にみられた運動における主体的原理の喪失ということ。これが日本だけの現象ではなく、戦後著しく発展した資本制社会の特徴であるが、ところが事態は社会変革への後をますます彼岸的に追放させ、特に自主独立路線への展望の日本共産党の事態はますます混迷させるようなプラグマチックな修正によってその日々ごとにかえられるマルクス主義思想の創造的全体性の喪失の意味に氏は対決してきた日本の数少ないマルクス主義哲学者の一人である。

このように小冊子は、スターリン主義に典型的に表われているマルクス主義の退廃、そして危機の根源に〝出口なし〟の情況へ挑戦する。

このことはマルクス・レーニン主義の原理（弁証法）を外的対立の規定として、今日、マルクス主義とは一体何なのかを内部的に鋭くつきだそうということである。

しかし、著者は今日のマルクス主義の危機の原因を、それ自体がマルクス主義の〝原理〟の修正である「国際革命の課題にしてもっぱらロシア一国の利益擁護の問題にすりかえられ、他国の革命はすべてロシア一国の利害によって調整され」に端的に現われたスターリンの「一国社会主義論」（一国だけでも社会主義の実現は可能という確力による〝原理〟）のまっ殺と「反社会主義的傾向を社会主義的なものを強弁するためのさまざまの偽造理論」）が必然的に生み出されるとみる。それは矛盾の中で、マルクス主義の原理が窒息化されたそしてこの現実をふまえて、マルクス主義の原理の再把握を通じて人間性と革命と思想の復権であると規定する。それは結びついている資本主義支配体制のいちじるしい発展と「安定」に、正統派の退嬰的情況を展開し続ける現在の思想状況に、闘争機会主義において、支配者階級の永久と支配的となる思想の物質的根拠、とくにイデオロギーの終焉論に端的に表われているマルクス主義批判を断罪しようとするのだが、外的現象に足をすくわれて感じて氏のモーチフはその平易な、整理された文体から感じさせるほど少くともほぼ緩慢いのだ。

・思弱的に、マルクス主義のとらえかえし

この小冊子は、〝疎外〟